

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 寒河江 光徳

本論文は、20世紀初頭に世評ではニーチェ風の生の喜びの賛美、自我称揚を歌い上げたとして、「デカダン派詩人」として人気を博したロシアの詩人コンスタンチン・バリモント（1867-1942）の前期作品テキストに現れる、自然と交感する自我、ないし「私」、超人のイメージの源泉を、ニーチェよりはむしろ、バリモントが「ニーチェ主義」の流行のはるか以前から愛読していたレールモントフ、ボードレー、ポー、ゲーテの4人の詩人の作品テキストとの関係の中に求めようとする試みである。その主な理由のひとつは、第1章で述べられているように、バリモントが「詩を翻訳する詩人」であったことであり、その経験を抜きにしては「超人」という語が登場する比較的初期の彼の詩は理解できないとされる。

続く第2章では、ロシアのロマン派詩人レールモントフ（1814-1841）の詩に触発されたとおぼしいバリモントの数編の詩が、作中に登場する「自然と自我」のイメージを中心に比較されまた詳細に分析される。その結果、両者には類似した自然の「空間構造」があり、また「自我＝詩人」と描写対象との共通した関係が見いだされるとされる。

第3章では、ボードレーの詩学の基本概念であるとされるコレスポンダンス（照応）の2つの要素「普遍的類推」「共感覚」が、バリモントの詩にどのように生かされているかが分析され、メタファーの技法の類似が指摘される。なお、かつてバリモントのものとしていたボードレーの詩「コレスポンダンス」のロシア語訳が、別人によるものだという指摘は貴重である。

第4章では、バリモントがロシア語に翻訳したポーの詩「大鴉」「鐘のさまざま」、評論「構成の原理」のテキストとバリモントの詩「雨」「炎への賛歌」のテキストとの間の類似点が具体的に明確に示されている。本章は論文中の白眉と言える。

最後に第5章では、「超人」という語をバリモントが用いる直接のきっかけとなった詩人ゲーテの作品との関連が論じられ、「永遠の生命」の象徴としての太陽のイメージの類似が指摘される。

以上4つの章にわたって詳細に展開される4人の詩人の作品テキストとバリモントの作品テキストとの間の関係の分析・記述から導かれる、様々な詩人のテキストが、バリモントの作品の「生成のためのテキスト」として機能しているという結論は概ね納得できるものであり、本論文はバリモント理解に重要な貢献をもたらしたと判断できる。ただし、シェリー、ホイットマン等々、バリモントとの関連で論じられるべき詩人はまだ数多い、「間テキスト性」という概念の理解が浅い、各章の分析の深度に差がある等々の問題点も指摘された。しかしこれらの欠点も本論文の価値を損なうまでには至っていない。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分値するものと判断する。